

【会員だより】

私は“それで”診療放射線技師をやめました。

川光 秀昭(54 回生)

私は昭和55年に京都放射線技術専門学校を卒業し、今年で63歳となります。つい数日前に年金(特別支給の老齢厚生年金)を受け取りました。5年前の58歳の時に神戸大学病院を定年前(当時の定年は60歳)退職し、現在はケアマネジャ(介護支援専門員)とデイサービス(通所介護)の介護保険施設を運営しています。認知症を発症する前に、退職を決意したきっかけ(きのう)現在の介護保険事業(きょう)そして将来の目標(あした)について、同窓の皆様にお伝えし次の人生を有意義なものにしたいと思えます。

### きのう(私が神戸大学病院を辞めたわけ)

ある日の会議で職員の懲戒処分についての議題が上がっていました。その時の私は医療技術部長の職にあり、医師、看護師、薬剤師以外の院内の医療職を統括する役目を担っているはずでした。

ところがその処分の職員は私の部下(医療技術部員)で、事件の資料を目にしたとき愕然としてしまいました。その職員は1年以上も前から警察の監視下にあり、半年前からは病院長や事務部長まで頻りに警察で事情聴取を受けていたのです。直属の上司であるはずの私は、全くとがめなし(それはそれで良いのですが)私は蚊帳の外で、それらの事実を全く知りません(知らされていません)でした。時期を同じくしてパワハラをはじめとした雑多で複雑な院内の人事案件に対応し、超多忙な日常を過ごしながら「そろそろ潮時かな」とも思っていました。ちょうどその頃神戸には単身赴任していましたが、めったに掛けてこない妻から電話があり「帰ってきたら」と(優しく)言われ退職を決心しました。

### きょう(介護事業をはじめました)

京都放射線技術専門学校を卒業するまでの(約)20年間に始まり、島根医科大学病院、神戸大学病院とほぼ20年ごとに人生の節目を迎えました。私にとって次の20年は歌「マイウェイ」のように、人生の幕を引くための最終章となります。



私ももうすぐ“高齢者”となりますが、戦後に懸命に働き、焼け野原から経済大国に押



し上げてきた人たちに報いることも恩返し(何の?)になるのではと思います、高齢者介護施設の運営を始めました。介護保険では高齢者(利用者)一人当たりの利用料金や施設当たりの利用者数に制限があり、医療保険(病院)のように(外来患者数を増やしたり、病棟の稼働率を上げたり)営業努力で収入を増やすことはできません。施設の規模が決まれば、最大の売り上げは決まってしまうのです。(悪徳な)会社が利益を増やそうとすると、現状の制度下では支出(人件費)を抑制(介護職員の低賃金)するしか方法は思いつきません。介護職員の賃金が上がらない原因の一つはここにあります。無意味なサービスの数を抑制して利用料金を抑え、職員が頑張るサービスが上げられれば収入が増えるような成果主義を取り入れ、高齢者(利用者)とその家



族、介護職員の三方が“えがお”になれるような仕組みを模索しています。

### **あした（将来の介護について）**

高齢者の福祉を介護保険に依存しては（すでに破綻しかけていますが）立ち行かなくなることは既に周知のことです。質の高いサービスを提供しても料金は同じ、いくら働いても給料は上がらない、このような（社会主義的な？）状況では、職員や利用者、家族の“えがお”を見ることはできないでしょう。2026 年度に迫った介護、医療保険の同時改正では、財源に合わせて利用者の負担が増加することだけは決まっているようです。介護保険制度にとらわれなくても運営ができる（自治体に匹敵する位の）“超”大規模な施設のもとで連携すると、利用者（高齢者）のニーズ（サービスの高品質、サービス数の増加、或いは料金の低額化など）に合わせた自由度の高い介護計画は、現状でも行うことができるようになると言われています。現行の制度自体は、現状のお役所のやり方では変えることはできないでしょう。しかしそれぞれの領域では、より良い運営が提案されつつあります。従来の介護制度にこだわらない私のような新規参入者に、チャンスが巡ってきているように感じるのは私だけでしょうか？

以上

---

\*通巻 244 号 2022 年 7 月 10 日発行(2021-No.2 より)